



てんぼ印のメンバー集合

てんぼ印が目指すところ

「てんぼ印」とは無茶々園の直営農場部門で、農業に関わりたいと考える人材の受け入れ機関です。特徴は産物の多様性（柑橘だけに依存せず野菜などの栽培も行っていること）、栽培した野菜を自社工場で加工し商品化まで一貫して行う「新しい就農モデル」を実践していることにあります。

この町（明浜町狩浜地区）の海沿いには公共の駐車場がある。その場所は、ひと昔前までは海だったそう。どれくらい昔かという、まだ現役で農業をしている“おっちゃん”が“思い出話”として語れるくらいの昔。車が普及して置き場に困るほど、海と山に挟まれ、平地の少ない集落。そんな町に移住して、今年でちょうど20年目に入る。

その駐車場のそばには、少し前まで新聞や牛乳の配達をしていた元タバコ屋さんがあり、そこにおばちゃんがいる。20年もいると顔見知りというより、お願いしたり、されたりの関係でもあったりもして、時間がある時はその駐車場で立ち話をすることもある。

「おまえ、いつまでこんなところにおるんど？（訳：ここにいますのですか）」「はよ、いねや（訳：街に帰ったほうがいいのでは?）」必ずと言っていいほど、このフレーズを投げかけられる。そのたびに、「なんでやねん！ここに居たくてここに居るんよ。選んでここに来たんよ」と返すと、「おまえ、かわっちゃん！（訳：変わってるね）」とお決まりのやりとりが始まり、そこから世間話が続く。

このおばちゃんにとって「こんな田舎町にわざわざ移住してくる人」は、よほどの“変わり者”か“都会で通用しなかった落伍者”である。なので「はよ、いねや」と言われるのは、ちょっとした自分への好意でもあると勝手に推察しているので仲良くやれている。



“地方(田舎暮らし)より都会(都市生活)へ” ずっと当たり前だったこの価値観。そんな価値観も少しずつ変わってきているなあと感じる。それこそ“地方創生”なんてカッコいい言葉が流行る前から田舎に来て農業をしにくるなんて良くも悪くも“変人”ばかりだったけど、この20年で少しずつ、これも良くも悪くも“普通”と言われそうな若者たちが都市から地方に来るようになってきた。



「どう生きるかについて考えること」結局はこれに尽きると思う。都市には都市の良さや機能（利便性や流動性なんか）それと同じで地方には地方の良さや機能(人との関係性や景色自然とか)があつて。もちろん、それぞれに不便さや煩わしさもある。そういうものを体験、理解したうえで自身を持つ好みや相性でどこに住むのか、どう生きるかを選べばいいと思う。しかし地方、田舎暮らしがいいと思っててもそこに様々な障壁があつて、例えば仕事のこととか、家族の理解とか、自身のコミュニケーション能力とか、それと“都市生活が普通、当たり前”という固定概念、社会の風潮。日本の重要な社会課題である人口減少とその遠因となる東京一極集中と地方の過疎化などなど。

よい「暮らし」「働き方」「生き方」

自分自身「よい暮らし」と「よい働き方」があれば「よい生き方」になると感じて、今ここに居る。安心感をもたらす人間関係のある“暮らし”。できなかったことができるようになり、それが誰かの役に立つ実感を得られる“仕事”。ちょっとした興奮と安心感のある“生き方”。いい仲間といい仕事ができたら楽しい。でも、ギスギスしていたら苦痛な時間の始まり。ノ

前向きに、明るくいたい。でも、ひとりぼっちで元気に明るくやるのは難しい。仲間にもそれぞれの趣向があり、何に幸せを感じるかは人それぞれ。でも、やっぱりみんな「カッコいい大人」になって、誰かの憧れ（ロールモデル）になれば、また新たなつながりが生まれるかも。

てんぼ印が目指すところそれは“だれもが地方生活、田舎暮らしが当たり前になる社会”という社会をつくっていくこと。そしてその為の受け皿となる”ということなのだろうと思う。

てんぼ印代表：村上尚樹



「自分の居場所」河上夏貴



前職は管理栄養士。病院や老健、保健指導などを経験し、結婚出産を経て、保育園給食で食材に興味をもち、職業として農業（てんぼ印）へ。文字にしてみれば、スムーズなようで…そうでもなかったてんぼ印に入るまでの10年。『チャングムの誓い』に憧れて入った世界で現実を突きつけられ、自分の欠点や弱さに悩む日々…自分の居場所の拭えぬ違和感。

だからこそ、てんぼ印には自分の居場所を作る決意で仲間入りしました。今年の春で4年目。去年はベトナム研修や生産者交流会、マルシェなど外に出る機会もあつて、自分自身が成長するきっかけとなり、自分たちが汗水たらし作った農産物を直接購入してもらえる機会も増えて、直に喜んでもらえることにやりがいを感じ、それを大事にしたいという想いが、今の私の原動力になっています。自分の居場所って誰かに必要とされ喜んでもらえる事なんだなと気づきました。

これからも身体と心によい食べ物を、届けていきたい。世の中に幸せと豊かさを届けることが私の目標。座右の銘は「臥薪嘗胆」。これからも日々を夢中で生きる姿を見せられたらいいなと思います。

「畑のたのしみ」小木曾千夏



学生の時、卒業後の進路として自分が勉強した有機農業を実際に仕事としたいと思っていました。担当教員に、当時てんぼ印のスタッフとして働いていた卒業生を紹介され、それが私とてんぼ印との出会いであり、愛媛で生きる人たちとの出会いの始まりでした。

こちらに来てから丸2年。楽しいだけではいけないのが、仕事だと思えます。常に自然と向き合うことになる農業。その大変さや難しさに目が向きがちなのですが、実はそれだけではなく、汗をかいて風を受けた時の心地よさや、土の感触、収穫時の柑橘の香り等々、ずっと身近にあつたけど、今まで気づけなかった小さな発見が、自分の中で積み重なっていく感覚が大好きで、今はそれらを楽しみに畑に出ています。

忙しい日々の中でも、自分が生産に携わったものを選んでくれる人がいること、守りたい、創りたい景色があること、周りの人への感謝を忘れずに。今日も笑顔でいきたいと思えます。

「働き方、生き方」金澤亮太・彩瑛



私達はこのてんぼ印で出会い、結婚し、夫婦となりました。2023年には子どもが生まれ、現在私は育児休暇中、4月から職場に復帰する予定です。亮太も6ヶ月育休をとり、現在ははりきって(?)仕事に復帰しております。

てんぼ印のスタッフで育児休暇を取得するのは私達が初めてでしたし、ましてや農業の世界で男性が育休を取得することも異質なことのようです。てんぼ印の中でも暗中模索でしたが、私達に一番合ったスタイルを皆で一緒に考えこのような形になりました。

現在地元のパートスタッフも増え、独身の人もいれば、子どもがいる人もいます。それぞれにそれぞれの個性や働き方があり、ここではそれが自然と尊重されます。(それは他人事ではなくて自分事でもあるからなのかな)

これからの私達の生き方が、てんぼ印の働き方、生き方のモデルのひとつとして形になれば嬉しいなと感じています。



てんぼ°印の乾燥野菜

東京生まれ、東京育ち。気づけば10年以上おります。前職での先輩が「やりがいのある仕事」「魅力ある人々」がいる場所が良い、と言っておりましたが、それが私にとってはこの地でした。てんぼ印では初の女性スタッフでしたが、今では半数以上が女性スタッフに。機械や設備の導入と、仕事の種類を増やしたことで働き方に多様性が生まれていったからだだと思います。

乾燥野菜も仕事の幅を広げたもののひとつ。今この時期（1月～2月）は切り干し大根製造真っ只中。大根を切ってから約3日で完成します。強風で飛ばされてしまうことも。寒いし、腰は痛いし、移ろいやすい天気気が気じゃない。それでも切り干し大根が始まると町の色んな人から声を掛けられてなんかちょっと嬉しい。自分たちの仕事が田舎のひとつの景色を作れているのだとしたら、それはこの仕事の魅力のひとつかな。

自然（天候）も人もコントロールすることはできないし、素敵なことばかりでもないけど。それでも少しの見栄と本音で、「農業って良い仕事だ」と言い続けていけたらなと思っております。

私は食べるのが好きです。それは今この仕事を続けている理由のひとつでもあります。山や畑で作業をした後にご飯を食べるのは楽しくて、幸せな時間です。でも、くたくたになって料理する気力がない時も…そんな時に欠かせないのが乾燥野菜。てんぼ印（自分ら）で作るまで、使ったことは無かったけれど、使いだすと必需品になりました。これ、本当の話なのです。家にある乾物を適当にいれてスープにしたり、炊き込みご飯にしたり。最近では乾燥玉ねぎを使った親子丼にはまっています。ドライトマトを使ったお菓子や、にんにくチップを使った野菜の揚げびたしをもらったこともあります。生の野菜とは違うので、ちょっと調理にコツがいる場合もあるとは思いますが、種類も豊富なのでもっとレパートリーを増やしていきたいと思っています。でも実は私は新しいレシピを考えるのがあまり得意ではありません。なぜなら考える前に食べてしまうからです。

酒井朋恵



パッケージも新しく

乾燥野菜自体が主役なのでできるだけ中身を見せたいと思い、全体が透明のパッケージ案もありましたが、そうすると中身がスカスカに見えたり、文字が見づらかったり、また、日光が当たると野菜の色が劣化してしまうということで、一からやり直すことになりました。中身を見せたいけど、色の劣化は防ぎたい。結果的に、包材の表面をマット加工することで、半透明になり、日光の吸収率がやわらぎ、若干変色を防げるようになりました。

カラフルになった乾燥野菜は使うときの楽しさにもつながります。また、袋の口にチャックが付いているので使いたいときに使いたい分だけ使えるのもポイントです。引き続きてんぼ印の乾燥野菜をお楽しみください。



今年のみかんの果汁も緊急事態

昨年の秋から重ね重ねお伝えしている通り、今年はレモンを除くあらゆる柑橘が大不作です。温州みかん・伊予柑・ポンカンも、前年の半作という惨憺たる結果でした。これから甘夏・ジューシーフルーツといった春の柑橘の出荷がはじまりますが、これらについても例年よりきわめて少ない見通し。今期は農家たちにとって本当に厳しい年となっています。



ジューシーフルーツも成っていない

柑橘の成りが少ないので、加工用の原料も出てきません。特に温州みかんの果汁は非常に少なく、いよいよ在庫が底つきそうな見通しです。しかも今期搾汁した果汁は作柄の影響もあって糖度、酸度ともにきわめて低調。そのまま瓶詰めして販売するにはちょっと厳しい品質です。そのため、温州みかんジュース、みかん伊予柑ジュースの販売については、2025年5月をもって、いったん休止させていただきます。

その代替品としてご提案するのが「みかんジュース(ブレンド)」。

温州みかんをメインにしながらも糖度の底上げにポンカンも、さわやかな風味を加えるためにジューシーフルーツ(=河内晩柑)をブレンドしています。配合比は温州みかん 6：ポンカン 3：河内晩柑 1 といった具合。果汁不足という苦境を凌ぐために作ったジュースではありますが、飲んでみるとなかなか良い仕上がり。

生産者紹介

明浜町の西の端、田之浜地区に、昨年からは若い力が加わりました。無茶々園のベテラン生産者・井上久和さんの孫・洋祐さんと、妻の千代美さんです。

二人とも関西で生まれ育ち、飲食業界で働いていました。洋祐さんは文字通り朝から晩まで働き、夫婦ですれ違いの多い生活。ストレスの多い毎日で考えたのは将来のこと。30代後半になり、このまま都会で働いて年を取った時にどうなるのか…と不安はつきませんでした。いつしか「農業をやりたい」という気持ちが芽生えます。洋祐さんは奈良県の農業高校出身で、お茶や野菜の実習を経験していました。愛媛の祖父のところへは、実は数回しか訪れたことはなかったのですが、いろいろ調べるうち、柑橘栽培なら自分にもできるのでは、と父に相談。「農業は甘くない。今の仕事を中途半端で辞めるようでは農業も続かない」と助言され、何年か後の就農を見据えて祖父にお願いに行ったら、なんと「もう農業をやめる！」との宣言。このまさかのタイミングで、数年後ではなくすぐに自分がやらなければ！と決意することになりました。千代美さんは、数年後のはずが数か月後に予定変更になりびっくり。勤務先からもひきとめられ、遅れて移住する案も

様々な品種の特性がバランスよく活かした、柑橘らしい味わいを楽しむことができます。自画自賛ではありますが、ぜひ一度味わってみてください。

かつて国産の柑橘ジュースは、精品として出荷できない柑橘の受け皿として製造されてきました。日本の市場では、加工用になるととたんに評価が下がります。そのため、安価で大容量を実現することができましたが、急速な生産量減少によってこれからは困難になるでしょう。ジュース原料用として作付して相応の評価を行う。そんな時代がまさに到来しようとしています。

なお、柑橘の果汁が不足しているのは日本だけではなく。果実の生育不良と樹体の枯死を引き起こす柑橘グリーンング病や天候不順によりアメリカやブラジルのオレンジ生産量が減少していることによって世界的に不足しています。スーパーやカフェで販売されるオレンジジュースの価格は軒並み値上がりしていることからわかる通り、柑橘の価値は世界的に高まっているのです。

このような背景を鑑み、無茶々園のジュースもこの5月から価格を改定させていただきます。消費者のみなさんにはご負担をおかけいたしますが、生産物の評価が上がることは農家、産地を守ることにつながります。この地で農業を継続していくために何とぞご理解くださいませ。

無茶々園は日本の片田舎にある小さな産地ですが、柑橘という産物を通して世界とつながっているのだなとしみじみ思います。国内だけでなくグローバルな姿勢もしっかり見極め、消費者のみなさんとも情報を共有しながら、しぶとく生き残るための必要な変化を繰り返していきますので、これからもおつきあいいただけますと幸いです。



ありましたが祖父に「二人一緒に来なきゃダメ！」と言われ、なかば強引に？田之浜への移住が決まりました。都会育ちの千代美さん、「田舎の生活はいやにならないか？」との周囲の心配をよそに「コンビニはないけど、インターネットがあればたいいのものは手に入るし、不自由を感じないように夫が支えてくれる。なにより田之浜の人たちが親切にしてくれて、まったくストレスがない。」

ところが、こうしてスタートした一年目はこれまでにないほどの大不作。落胆したかと思いきや、「おじいちゃん(指導者)のおかげもあるけど、マメに見回ってイノシシ対策を補強したところは無事収穫できた。気候変動にあわせて作りやすい品種に切り替えるとか、研究して手をかければ必ず続けていける。」さらに、「農業はこれから『流行る』職業だと思う。家に田や畑があるけどどうしよう…という話をよく聞くが、新規就農には補助金制度もあるし、兼業で少しずつでもいいからぜひ一歩踏み出してほしい。」

晴れた日はみかん山へ、雨の日はゆっくり家事をして、以前とは違っていつも二人一緒の生活。おじいちゃんには冷やかされますが、この移住、就農は大正解だったようです。